花子

森鴎外

青空文庫

Auguste Rodin は為事場へ出て来た。

広い間一ぱいに朝日が差し込んでゐる。この〔Hoˆtel Biron〕といふのは、もと或る富豪の作つた、贅沢な建物であるが、つひ此間まで聖心派の尼寺になつていた。Faubourg Saint-Germain の娘子供を集めて〔Sacre-Coe&ur〕の尼達が、此間で讃美歌を歌はせてゐたのであらう。

巣の内の雛が親鳥の来るのを見附けたやうに、一列に並んだ娘達が桃色の脣を開いて歌つたことであらう。

その賑やかな声は今は聞えない。

併しそれと違つた賑やかさが此間を領してゐる。或る別様の生活が此間を領してゐる。それは声の無い生活である。声は無いが、強烈な、錬稠せられた、顫動してゐる、別様の生活である。

幾つかの台の上に、幾つかの礬土の塊がある。又外の台の上にはごつ〳〵した大理石の塊もある。日光の下に種々の植物が華さくやうに、同時に幾つかの為事を始めて、かはる〳〵気の向いたのに手を着ける習慣になつてゐるので、幾つかの作品が後れたり先だつたりして、此人の手の下に、自然のやうに生長して行くのである。此人は恐るべき形の記憶を有してゐる。その作品は手を動さない間にも生長してゐるのである。此人は恐るべき意志の集中力を有してゐる。為事に掛かつた刹那に、もう数時間前から為事をし続けてゐるやうな態度になることが出来るのである。

ロダンは晴やかな顔附をして、この許多の半成の作品を見渡した。広々とした額。中程に節のあるやうな鼻。白いたつぷりある髯が腮の周囲に簇がつてゐる。

戸をこつ〳〵と叩く音がする。

「Entrez !」

底に力の籠つた、老人らしくない声が広間の空気を波立たせた。

戸を開けて這入つて来たのは、猶太教徒かと思はれるやうな、褐色の髪の濃い、三十代の痩せた男である。

お約束の Mademoiselle Hanako を連れて来たと云つた。

ロダンは這入つて来た男を見た時も、その詞を聞いた時も、別に顔色をも動かさなかつた。

いつか Kambodscha の酋長が巴里に滞在してゐた頃、それが連れて来てゐた踊子を見て、繊く長い手足の、しなやかな運動に、人を迷はせるやうな、一種の趣のあるのを感じたことがある。その時急いで取つた dessins が今も残つてゐるのである。さういふ風に、どの人種にも美しい処がある、それを見附ける人の目次第で美しい処があると信じてゐるロダンは、此間から花子といふ日本の女が〔variete'〕に出てゐるといふことを聞いて、それを連れて来て見せてくれるやうに、伝を求めて、花子を買つて出してゐる男に頼んで置いたのである。

今来たのはその興行師である。〔Impre'sario〕である。

「こつちへ這入らせて下さい」とロダンは云つた。椅子をも指さないのは、その暇がないからばかりではない。

「通訳をする人が一しよに来てゐますが。」機嫌を伺ふやうに云ふのである。

「それは誰ですか。フランス人ですか。」

「いゝえ。日本人です。L'Institut Pasteur で為事をしてゐる学生ですが、先生の所へ呼ばれたといふことを花子に聞いて、望んで通訳

をしに来たのです。」

「宜しい。一しよに這入らせて下さい。」

興行師は承知して出て行つた。

直ぐに男女の日本人が這入つて来た。二人共際立つて小さく見える。跡に附いて這入つて戸を締める興行師も、大きい男ではないのに、二人の日本人はその男の耳までしかないのである。

ロダンの目は注意して物を視るとき、内眥に深く刻んだやうな皺が出来る。この時その皺が出来た。視線は学生から花子に移つて、そこに暫く留まつてゐる。

学生は挨拶をして、ロダンの出した、腱の一本一本浮いてゐる右の手を握つた。〔La Danaïde〕や Le Baiser や Le Penseur を作つた手を握つた。そして名刺入から、医学士久保田某と書いた名刺を出してわたした。

ロダンは名刺を一寸見て云つた。「ランスチチユウ・パストヨオルで為事をしてゐるのですか。」

「さうです。」

「もう長くゐますか。」

「三箇月になります。」

「〔Avez-vous bien travaille〕?」

学生ははつと思つた。ロダンといふ人が口癖のやうに云ふ詞だと、兼て噂に聞いてゐた、その簡単な詞が今自分に対して発せられたのである。

「Oui, beaucoup, Monsieur !」と答へると同時に、久保田はこれから生涯勉強しようと、神明に誓つたやうな心持がしたのである。

久保田は花子を紹介した。ロダンは花子の小さい、締まつた体を、不恰好に結つた高島田の巓から、白足袋に千代田草履を穿いた足の尖まで、一目に領略するやうな見方をして、小さい厳畳な手を握つた。

久保田の心は一種の羞恥を覚えることを禁じ得なかつた。日本の女としてロダンに紹介するには、も少し立派な女が欲しかつたと思つたのである。

さう思つたのも無理は無い。花子は別品ではないのである。日本の女優だと云つて、或時忽然ヨオロツパの都会に現れた。そんな女優が日本にゐたかどうだか、日本人には知つたものはない。久保田も勿論知らないのである。しかもそれが別品でない。お三どんのやうだと云つては、可哀さうであらう。格列荒い為事をしたことはないと見えて、手足なんぞは荒れてゐない。併し十七の娘盛なのに、小間使としても少し受け取りにくい姿である。一言で評すれば、子守あがり位にしか、値踏が出来兼ねるのである。

意外にもロダンの顔には満足の色が見えてゐる。健康で余り安逸を貪つたことの無い花子の、些の脂肪をも貯へてゐない、薄い皮膚の底に、適度の労動によつて好く発育した、緊張力のある筋肉が、額と腮の詰まつた短い顔、あらはに見えてゐる頸、手袋をしない手と腕に躍動してゐるのが、ロダンには気に入つたのである。

ロダンの差し伸べた手を、もう大分ヨオロツパ慣れてゐる花子は、愛相の好い微笑を顔に見せて握つた。

ロダンは二人に椅子を侑めた。そして興行師に、「少し応接所で待つてゐて下さい」と云つた。

興行師の出て行つた跡で、二人は腰を掛けた。

ロダンは久保田の前に烟草の箱を開けて出しながら、花子に、

「マドモアセユの故郷には山がありますか、海がありますか」と云つた。

花子はこんな世渡をする女の常として、いつも人に問はれるときに話す、極まつた、〔ste're'otype〕な身の上話がある。丁度あの Zola の Lourdes で、汽車の中に乗り込んでゐて、足の創の直つた霊験を話す小娘の話のやうなものである。度々同じ事を話すので、次第に修行が詰んで、routine のある小説家の書く文章のやうになつてゐる。ロダンの不用意な問は幸にも此腹藁を破つてしまつた。

「山は遠うございます。海はぢき傍にございます。」

答はロダンの気に入つた。

「度々舟に乗りましたか。」

「乗りました。」

「自分で漕ぎましたか。」

「まだ小さかつたから、自分で漕いだことはございません。父が漕ぎました。」

ロダンの空想には画が浮かんだ。そして暫く黙つてゐた。ロダンは黙る人である。

ロダンは何の過渡もなしに、久保田にかう云つた。「マドモアセユはわたしの職業を知つてゐるでせう。着物を脱ぐでせうか。」

久保田は暫く考へた。外の人の為めになら、同国の女を裸体にする取次は無論しない。併しロダンが為めには厭はない。それは何も考へることを要せない。只花子がどう云ふだらうかと思つたのである。

「兎に角話して見ませう。」

「どうぞ。」

久保田は花子にかう云つた。「少し先生が相談があると云ふのだがね。先生が世界に又とない彫物師で、人の体を彫る人だといふことは、お前も知つてゐるだらう。そこで相談があるのだ。一寸裸になつて見せては貰はれまいかと云つてゐるのだ。どうだらう。お前も見る通り、先生はこんなお爺いさんだ。もう今に七十に間もないお方だ。それにお前の見る通りの真面目なお方だ。どうだらう。」

かう云つて、久保田はぢつと花子の顔を見てゐる。はにかむか、気取るか、苦情を言ふかと思ふのである。

「わたしなりますわ。」きさくに、さつぱりと答へた。

「承諾しました」と、久保田がロダンに告げた。

ロダンの顔は喜にかゞやいた。そして椅子から起ち上がつて、紙とチヨオクとを出して、卓の上に置きながら、久保田に言つた。

「ここにゐますか。」

「わたくしの職業にも同じ必要に遭遇することはあるのです。併しマドモアセユの為めに不愉快でせう。」

「さうですか。十五分か二十分で済みますから、あそこの書籍室へでも行つてゐて下さい。葉巻でも附けて。」ロダンは一方の戸口を指ざした。

「十五分か二十分で済むさうです」と、花子に言つて置いて、久保田は葉巻に火を附けて、教へられた戸の奥に隠れた。

＊　＊　＊　＊　＊

久保田の這入つた、小さい一間は、相対してゐる両側に戸口があつて、窓は只一つある。その窓の前に粧飾のない卓が一つ置いてある。窓に向き合つた壁と、其両翼になつてゐる処とに本箱がある。

久保田は暫く立つて、本の背革の文字を読んでゐた。わざと揃へたよりは、偶然集まつたと思はれる collection である。ロダンは生れ附き本好で、少年の時困窮して、Bruxelles の町をさまよつてゐた時から、始終本を手にしてゐたといふことである。古い汚れた本の中には、定めていろ〳〵な記念のある本もあつて、わざ〳〵ここへも持つて来てゐるのだらう。

葉巻の灰が崩れさうになつたので、久保田は卓に歩み寄つて、灰皿に灰を落した。卓の上に置いてある本があるので、なんだらうと思つて手に取つて見た。

向うの窓の方に寄せて置いてある、古い、金縁の本は、聖書かと思つて開けて見ると、Divina commedia の Edition de poche であつた。手前の方に斜に置いてある本を取つて見ると、Beaudelaire が全集のうちの一巻であつた。

別に読まうといふ気もなしに、最初のページを開けて見ると、おもちやの形而上学といふ論文がある。何を書いてゐるかと思つて、ふいと読み出した。

ボオドレエルが小さいとき、なんとかいふお嬢さんの所へ連れて行かれた。そのお嬢さんが部屋に一ぱいおもちやを持つてゐて、どれでも一つやらうと云つたといふ記念から書き出してある。

子供がおもちやを持つて遊んで、暫くするときつとそれを壊して見ようとする。その物の背後に何物があるかと思ふ。おもちやが動くおもちやだと、それを動かす衝動の元を尋ねて見たくなるのである。子供は Physique より〔Métaphysique〕に之くのである。理学より形而上学に之くのである。

僅か四五ページの文章なので、面白さに釣られてとう〳〵読んでしまつた。

其時戸をこつ〳〵と叩く音がして、戸を開いた。ロダンが白髪頭をのぞけた。

「許して下さい。退屈したでせう。」

「いゝえ、ボオドレエルを読んでゐました」と云ひながら、久保田は為事場に出て来た。

花子はもうちやんと支度をしてゐる。

卓の上には esquisses が二枚出来てゐる。

「ボオドレエルの何を読みましたか。」

「おもちやの形而上学です。」

「人の体も形が形として面白いのではありません。霊の鏡です。形の上に透き徹つて見える内の焔が面白いのです。」

久保田が遠慮げにエスキスを見ると、ロダンは云つた。「粗いから分かりますまい。」

暫くして又云つた。「マドモアセユは実に美しい体を持つてゐます。脂肪は少しもない。筋肉は一つ〳〵浮いてゐる。Foxterriers の筋肉のやうです。腱がしつかりしてゐて太いので、関節の大さが手足の大さと同じになつてゐます。足一本でいつまでも立つてゐて、も一つの足を直角に伸ばしてゐられる位、丈夫なのです。丁度地に根を深く卸してゐる木のやうなのですね。肩と腰の濶い地中海の type とも違ふ。腰ばかり濶くて、肩の狭い北ヨオロツパのチイプとも違ふ。強さの美ですね。」

青空文庫情報

底本：「鴎外全集　第七巻」岩波書店
　　1972（昭和47）年5月22日発行
初出：「三田文学　第一巻第三號」
　　1910（明治43）年7月1日
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記を新字にあらためました。
入力：ふるかわゆか
校正：土屋隆
2005年5月6日作成
2005年10月22日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花子

森鴎外

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/